

主張 「世界の課題、日本のこれから」

黒川 清

世界が「グローバル」になり、インターネット、さらにデジタルの急速な進展で瞬時に多くの情報が世界に広がる時代になり、国家にしても、組織にしても、科学研究と新しい技術の開発は、極めて大事な政策課題になった。多くの研究は、大学や公的研究機関あるいは一部の企業の研究部門で行われている。その基本は特に大学・大学院教育のアウトプットとしての人材の育成が鍵“Key”である。科学研究と技術の習得により、新しい社会的な価値を作るシステム、器械、そして制度等ができてくる。そのミッションは、グローバル時代では、各国の競争、また共力によって、社会をより良くしようとする社会活動の1つだ。このような科学研究の進歩の成果を今になって俯瞰的にみると、時に地球で起こる自然現象による大災害よりは、むしろ人間によって大きな事故が起こる可能性さえ出てきた。ここで大事なのは、責任のある立場の人たちばかりでなく、次の世代を育成していく教育の課題がある。

教育には基本的な初等・中等教育から大学、大学院などの高等教育によるものがあるが、より社会に近い企業等による「人材」育成がある。高等教育も今までの大学教育とはまた違って、自分自身の力でどのようなネットワークを作れるか、これもこれからの1つの大きな教育だろう。例えて言えば、どのぐらいの若者が海外へ行き、異文化に触れながら共に勉強し、お互いの研究とその支援のネットワークを作っていくのか、これが「国民国家」という“パラダイム”を超えてはるかに高い価値を生む可能性がある。若者たちは、国境を超える自分たちのネットワークを使って世界の問題について新しい回答をもたらす可能性が大きい。お互いの国境を越えた教育、あるいは大学卒業後のキャリアも最近ではいろいろな機会と選択肢が増えている。デジタルな関係で国境を越え、多くの共同作業が可能となって、新しい世代が育っている。さらに科学研究の成果は世界中で共有

され、より良い世界を作ろうとする競争も生まれる反面、時には人間による大惨事が起こる可能性さえあるのだ。

オゾンホール研究で知られるパウル・クルツツェン博士（1995年ノーベル化学賞受賞）は、「アントロポセン（Anthropocene/人新世）」という用語を通じて自分たち人間の活動が地球の表面にどれだけ影響を及ぼしているかを自覚して欲しいと述べている。人類初の核実験である1945年のトリニティ実験が「アントロポセン」の始まりの一つと考えられているが、第二次世界大戦後、人間活動の加速的増大により、温暖化ガスの増加、オゾン層の破壊、海洋の酸性化、熱帯雨林の減少など地球環境に大きな悪影響をもたらされてきている。

これからの若い世代が国境を超えた共同体となって勉強し、競争する、協力体制を作る、という枠組みが非常に大事なのだ。先進国と発展途上国の若者の教育、研究などを介した交流が盛んになっているのは素晴らしい。

科学研究には、それなりの財源、また企業での研究開発もあるし、企業、そして大学、あるいは研究所との共同作業も国境を越えようとする傾向があるのは大変意味のあることだ。成果をお互いに共有していく論文と言う形であり、よりインパクトの高い論文への競争にもなっている。

科学技術ばかりではなく、教育によるグローバル化、世界に通用するリーダーシップを培うような教育も大きな役割を担ってきており、自国のためばかりではなく、世界のネットワークで問題を解決していくことが求められている。実際、そのような活動はいろいろな国際的な組織、例えば、WHO、OECDなどの国際機関、またG7、G20サミットなどの活動はご承知の通りだ。

これからの人材育成をどうするか、これは私としては特に強調したいところであり、自分の経験からもそれを大事にしている。途上国の若者も含めた多くの世界のネットワークを作りながら、「教育や研究の国境を超える機会を増やす」ことが大事なのだ。なぜ留学が大切なのか？ それは一人ひとりにとっては「国のため、社会のため」ということはあるにしても、最終的にはそれぞれの国が世界の問題について協力する「キッカケ」にな

る、これが教育、科学に関わる人達の主要な責任の一つなのである。

これからの大きく変わってきている世界の有り様は、ボーダーレスであり、将来を担う人材の育成から言えば、国だけではなく、お互いの個人個人のネットワークを作り、国家、「ナショナル」というコンセプトを超えた「インターナショナル」、あるいは「グローバル」といった大きなコンセプトを内的に含んだ教育と研究協力と言うシステムを広げていく必要がある。文化的あるいは歴史的な背景は違って、地球の将来を考え、行動するのが大事な視点だ。不安定な世界の状況になっているのは、この地球で唯一、それなりの知性と能力を持っている人間たちの責任なのだ。「デジタル」ではない、人間の「アナログ」な感性の育成が、いかに大事なグローバル世界の責任なのか、を問いかけているのだ。

「アントロポセン (Anthropocene)」、地球規模の大きな災難、例えば火山の大爆発、台風、津波とか、大きな暴力的な災害があったとしても、これからは意外に、この地球上で最も知性があると言われている人間の手によって世界的な大災害が起こる可能性さえ言われている。これからの教育、特に高等教育など、世界のリーダーになるような人達が、「ナショナルリズムを超えた世界への貢献」という責任感をもって次世代を育成していくことが大事なのだ。高等学校あるいは大学、大学院にしても、これからの世代が協力しながら国家を超えて新しい地球のために貢献することが求められている。

黒川 清 (くろかわ きよし)

1936年生まれ。在米14年。UCLA医学部内科教授、東大医学部内科教授、東海大医学部長などを歴任。日本学術会議会長、WHOコミッショナー、第一次安倍内閣、福田内閣で日本初の科学担当の内閣特別顧問に就任。東京電力福島原子力発電所事故調査委員会委員長を務める。現在は東京大学・政策研究大学院大学名誉教授、東海大学特別荣誉教授、世界認知症審議会副議長等。主な著書は「規制の虜—グループシンクが日本を滅ぼす」(講談社、2016年)、「考えよ、問いかけよ『出る杭人材』が日本を変える」(毎日新聞出版、2022年)等